

2018

5

MAY

—
ご自由に
お読みください

SKY FR&U

on

MARK!

ニッポンは、
空まで面白い！

Features 01

神戸・異文化が
交錯する港町へ。

Features 02

ローカルと歩く、
茨城ガイド



to | 神戸

purpose | 街のカオスを体感する

tripper | 福田春美 (ブランディングディレクター)

「神戸」

Feel the
exotic mood

PHOTO
Norio Kidera

異文化が
交錯する
港町へ。

古い港町ではやはり多様な文化が溶け合って、
豊かな生活が育まれている。
ブランディングディレクター 福田春美さんが

> 右ページ

神戸は日本で初めて喫茶店ができた街であり、コーヒーの歴史は長い。昭和の時代の喫茶店が多く残っていて、暮らす人々に、また旅人にも穏やかな時間を提供している。写真は〈にしむら咖啡店〉。

> 左ページ

関西でもっとも大きなチャイナタウンである南京町。神戸牛、鰯、しゃぶしゃぶの看板と並んで、中国語の看板が掲げられている路地もあった。様々な国が混じり合う姿が実に神戸らしい。

Profile

福田春美

Harumi Fukuda

企業のプロジェクトをはじめ、インテリアスタイリングなど、ファッションからライフスタイル系まで、幅広くブランドディレクションを手がけている。

神戸の人に触れて感じるのは
それぞれが自分らしい世界の中で
きちんと地に足つけて暮らしていること。
シャイで親切で、ロマンチック。
神戸らしさを追いかけて。

洋食屋〈スターシップ〉にて「神戸らしさ」について話をする酒井さん（左）と春美さん（右）。赤いチェックのテーブルクロスがとても似合う、船室のような空間。元町のハイカラさを象徴している。





元町5丁目の看板には飾飾のような丸い照明があるが、4丁目では四角いものになる。ディテールに面白さが。



《スターシップ》の人気メニューのオムレツ。ふんわりオムレツに特製デミグラスソース。王道の洋食。



舞台装置のようでもある《村田家具》のファサード。上広さんが出てきて見送ってくれた。親切で優しい神戸の人々。



自家焙煎の《はた珈琲店》では、ハイカラブレンドと港町ブレンド、濃いめのオリジナルブレンドをいただいた。

SKY FRAU on MARK!



01



02



03



04

神戸の街は、いつも船に紐付いている。

家具のような入り口に導かれ、旅が転がり出していった。

01 〈旧グッゲンハイム邸〉は、和洋を混ぜ合わせた折衷館。02 意匠の細部に当時の技術が見える。03 天井の高い1階の部屋では、大規模なコンサートやピアノや声楽の個人レッスンなども行われている。04 分銅で開閉する窓からは、美しい他の洋館が見えた。

本降りになりだした雨を避けるようにしてアーケードの中へと逃げ込み、元町5丁目を6丁目の方向へと歩く。左手に、周囲とは異なるまるで「家具のような」ファサードを見つけて、福田春美さんが足を止めた。ブランドینگディレクターとして多様な分野で発信をしている「目利き」には、「こゝ、面白そうじゃない?」と映って、ふらりと立ち寄ることに。〈田村家具〉の店内には、ファサードと同じ、ヨーロッパ調の装飾が施された家具が陳列されている。奥から店番をしていた女性が出てきて、解説してくれる。

「神戸の港に就航する船のほとんどはヨーロッパ航路だったから、ヨーロッパで見たものを船大工さんたちが真似て作り始めたの。それが神戸

家具の元になって、昔は婚礼家具としてお嫁に行く時に持って行ったんですけど。今はなかなか(笑)」そうやって〈田村家具〉の上広響子さんと神戸家具の歴史について話し込んでいくところへ、近所の女性、なにやらお弁当のようなものを差し入れて帰って行った。「あら、恥ずかしい(笑)」と上広さんが笑う。ひとしきり話した後、店先に並んだ世界的な写真家のハーブ・リッツやバンクの女王と言われるバティ・スミスの書籍を春美さんが見つけて、「このラインナップは上広さんのご趣味ですか?」と尋ねると、嬉しそうに頷いた。店先の書物は、街の人たちが自由に借りることができそう。商店街の「なんでもない」家具屋さんにふらりと立ち寄ったつもりが、春美さんが惹かれた理由が明確になって、一気に神戸に迎え入れられたようだった。

「ちょっと手前に〈スターシップ〉っていうオムレツの店があるから、ぜひ行ってみよう。さっきお弁当を差し入れてくれたの、その方だから。〈スターシップ〉の店内もうちの先代が内装を手がけたのよ。導かれるように、4軒手前に戻って、その名の通りまるで船のような店の入り口を開けた。

船の形をしたオムレツの美味しい店。

「あら、さっき田村家具さんのところにいたでしょう」と迎えてくれたのは、酒井智恵子さん。かつて1階をカフェ、2階を写真スタジオとして先代が営んでいた店を、ご主人と一緒に洋食店としてリニューアルオープン。今では常連さんが孫を連れてやってくるほどの老舗へと育てた方だった。2階へと通されると、そこは船の舵が照明としてあしらわ

れ、船窓が取り付けられた、なんとも言えないクラシックな空間。神戸はやはり、船に紐付いている。名物であるオムレツを食べると「懐かしい味!」と思わず口にしてしまう春美さん。シチューもデミグラスソースも丁寧に作られていることがわかるという。酒井さんに神戸らしさについて尋ねた。

「そうね、表にブワッと出すわけじゃないんです。パツと見たら、もしかしら地味かもしれないわね。でも、さりげなくお洒落っていうのかな。田舎の中にエレガンスがあるっていうのかしらね(笑)。私は、子どもの頃からこの辺ですからね、もう街を歩く人たちがみんな素敵で。喫茶店に入って窓際で歩いている人を見て、その中の一人に、早く自分もなるんだって幼い頃は思ってたわ(笑)」神戸は「マダムたちがとても素敵」



《旧グッゲンハイム邸》のサンルーム。改装は元宮大工の手を借りて行われ、過去に改装された箇所は資料にあたり、できるだけ建設当時へと戻すように手を入れている。ディテールに時代を感じる。

01 いつもは4人の姉妹で店を切り盛りしている喫茶〈思いつき〉。
02 創業当時のモノクロ写真。周囲の風景は変わったが、〈思いつき〉は変わっていない。03 看板を出す紀久恵さん。04 昔のアルバムを見ながら、笑ってしまう朗子さんと春美さん。なんと幸せな時間だったろう。

01

02



03



04

文化が混ざり合うと
美味しいものが食べられる。

神戸港に集まった船がヨーロッパ航路のためか、欧米はもちろん、その経由地となった地域の人々も神戸には多く住んでいる。インド、ベトナム、韓国など、アジアの人々が小

と、春美さん。上広さんと酒井さん、知り合ったばかりの二人の女性のハイカラさに神戸という街の表情のうなものを見た気がしていた。シャイで親切で、ロマンチスト。
〈スターシップ〉の他にも往年の神戸の空気を残している店をと、酒井さんに教えてもらったのがほとんどはす向かいと言っている場所にある〈はた珈琲店〉。元町の中でも、5丁目は特に歴史ある店が残っている。
〈はた珈琲店〉では、かつて1階で洋服店を営み、2階でコーヒーを出していたそう。同じ店舗で少し形を変えて営業している店が多いのだろうか。時代とともに変化して形を変えつつも、本質は変わらない。そんな印象。マスター畑芳弘さんの隣には、看板娘として畑さんのお母さんが座っていた。「私もね、神戸っ子。コーヒーは好きやねん。コーヒーとビールが好きやから」と語る85歳の頼もしさ。「この町内は、とても仲がいいんです」と春美さんが話を向けると、「そうなんです。一つの船に乗っている仲間のようなものですから」とマスターが言った。



01 横尾忠則現代美術館にて。一柳慧作曲「オペラ横尾忠則を歌う。」のレコード。02ミュージアムショップにはオリジナルのアイテムも。03横尾自ら主演を務めた『新宿泥棒日記』のポスター草案。この下書きだけで、配色のセンスの非凡さがわかる。04いくつかの巨大な眼と資料に見入る春美さん。

01

02



03



04

さな集落を形成し、それぞれの国の生活を忘れることなく、神戸の街を謳歌している。中国人はさすが、きちんとチャイナタウンがある。春美さんが「この店だけはどう一度行きたい!」と、かつて友人に連れられてきたことがあるという韓国系の店(アイチャン)へ昼食を食べに行つた。住宅街の中にボンとあるその店は、味噌仕立てのテンジャンスープが有名な店だった。春美さんにとって神戸の象徴的な味は、胃の腑に染み渡るような優しい韓国のスープ。「仕事で何度か来たことがあるくらいで、神戸はそれほど親しみがある街ではないんです。今回も神戸行きが決まってから、調べるほどに、芯を掴みづらいというか(笑)。それくらい多様なものがミックスされているんだと思うんですね。あそこに行けば神戸がわかる、なんてお店やスポットはないんだと思うんです。人それぞれの見方で街を歩けば、まったく違う景色が見えてくるのが神戸なのかもしれない」

だからこそ、行く先々で「神戸らしさ」を求めて人に会い、その出会いそのものが旅の目的になる。

市中心部からは少し離れた郊外の静かなベッドタウンである塩屋地区。海を望む小高い丘にある(旧グッゲンハイム邸)は、言うなれば過去と現在がミックスされ、更新されている場所だ。明治・大正期に滞在したドイツ系の貿易商が建てた、い



01



03

01『鉄人28号』の原作者、横山光輝は神戸市須磨区出身。記念して実物大の“鉄人”が展示されている。02〈アイチャン〉の名物、テンジャンスープ。キムチなども本格派の浅漬け。春美さん曰く「塩加減がちょうどいい」。03旧居留地の象徴的な建築の一つ、百貨店の大丸（現大丸松坂屋百貨店）。04ライトアップされた南京町のあずまや。05海と山が近いことも、神戸の大きな特徴のひとつ。ケーブルカーから見下ろした、神戸の街。06まるでインド人の自宅へ招かれたような〈クスム〉。地下ではスパイスも販売している。07実は餃子の街でもある。〈餃子屋 満園〉のシンプルで、食べ始めたら止まらない餃子。08〈エビアンコーヒー〉の店頭でサーブしていたお酒落なマダム。09 港内クルーズで船乗りのように海から神戸の街を眺めた。



02



04



05

温もりは、人と人との間に。
優しさと望郷の喫茶店。

その日は定休日ながら、連絡をすると「店にいるから、いいわよ、いらっしやい」と迎え入れてくれた（思いつき）。創業63年の店内には、まるでマスコットガールのように82歳の谷岡朗子さんが座っていて、「よういらっしやった。ありがと」と手を合わせて笑ってくれる。かつて周囲には造船業を営む工場が多くあり、そこで働く工員たちが休憩するためのスペースとして重宝されていたという。内装は、やはり、船大工が手がけたそう。

「父が経営していた鉄工所を閉めた後、女手のできる仕事をとこーヒーを飲んだこともなかった母が、姉の朗子と始めたのが、この店なんです。店名はまさしく思いつきで始めたから、そのままつけちゃったのね（笑）」

そう説明してくれたのは、妹の湯川紀久恵さん。とてもしつかりした受け答えなのだが、それでも76歳。

いつもはさらに妹の72歳の晴江さんと84歳の満知子さんの4人で切り盛りしている。4人姉妹と書かなかつたのは、実は全部で14人兄弟だったから。そのうちの4人で店を営んでいるのだという。どこか懐かしい味のするミルクコーヒーを淹れてもらいながら話を聞いていると、紀久恵さんが裏からアルバムを引っ張り出

The Local Favorites Kobe Address

にしむら珈琲店 中山手本店

▲ 神戸市中央区中山手通1-26-3
☎ 078-221-1872

エビアンコーヒー

▲ 神戸市中央区元町通1-7-2
☎ 078-325-3317

スターシップ

▲ 神戸市中央区元町通5-3-14
☎ 078-341-1548

はた珈琲店

▲ 神戸市中央区元町通5-7-12
☎ 078-341-3410

田村家具

▲ 神戸市中央区元町通5-3-12
☎ 078-341-2916

旧グッゲンハイム邸

▲ 神戸市垂水区堀屋町3-5-17
☎ 078-220-3924

思いつき

▲ 神戸市兵庫区西出町1-2-18
☎ 078-671-4652

横尾忠則現代美術館

▲ 神戸市灘区原田通3-8-30
☎ 078-855-5607

アイチャン

▲ 神戸市須磨区大池町2-1-27
☎ 078-732-5444

クスム

▲ 神戸市中央区山本通12-1
異人プラザ203
☎ 078-221-0229

餃子屋 満園

▲ 神戸市中央区三宮町2-11-1
センタープラザ西館
☎ 078-331-1838



08



06



09



07

してきて、店を開いたばかりの60年以上前のモノクロ写真を見せてくれた。ハイカラな空気はその写真にも充滿していて、春美さんの心が動いているのが伝わってくる。家族の話をして、今年の正月にどこに旅行に行ったのかと尋ねられ、美味しいものは食べたの? と心配される喫茶店。まるで実家のようなその空間で、静かに雨音を聞いた。春美さんは、旅をこう振り返った。

「今回の旅は、まさしく〈思いつき〉であちらこちらへたどり着いて、そのどこでもきちんと迎え入れていただいた。旅人に優しいのは港町だからというだけではない気がします。とにかくマダムたちがオシャレで親切で、きちんと向き合ってくれるというか。それは当たり前のように思えて、稀有なことだと思うんです」

店を出て車が走り出して見えなくなるまで、〈思いつき〉のマダムたちは手を振って見送ってくれた。

神戸だけの特別な色、どこにもない国の色。

旅の最後は、〈横尾忠則現代美術館〉へと向かった。事前に申請すれば誰でも閲覧できる膨大な資料の中から、若き日の自画像や自ら主演を務めた大島渚監督『新宿泥棒日記』のポスター原案など、目の覚めるような色使いの作品を見せていただく。そこには神戸の混沌がベースになっているのかもしれないと、旅を巡って目にしてきたものの多様さから、勝手に解釈してしまう。

「異なるものが共存しているのが神戸なのだ、この旅を通じて強く実感しましたね。横尾さんの作品にも描かれているけれど、看板や街灯も画的ではなく個性があつて。オレンジ色の街灯に照らされた神戸は、どこか異国のよう。本当はどこにもない、神戸だけの特別な色なのに」と、春美さんは言った。